

2019年 神奈川リフレッシュプログラム サポートのお願い!

福島っ子を神奈川に招く「こらっせ」の活動は、賛同して下さるみなさまに支えられ8年目を迎えることになりました。あの3.11の衝撃の直後、子どもたちの未来のためにささやかでも息の長い活動をという思いでスタートし、この8年間、多くの方々と出会い、学び、そして力をもらいました。

「こらっせ」は「リフレッシュプログラム」に加え、「こらっせユース」による春休み・夏休みの榎葉町学童保育の応援へと活動を少しずつ広げています。昨年からは、子どもの健康問題への取り組み、とりわけ子ども・若者たちへの甲状腺検査の徹底を実現したいと、神奈川でネットワークを作り、勉強会を重ね、国への要請をおこなっています。

今年も、榎葉町・双葉町・富岡町・いわき市の子どもたちを神奈川に招くリフレッシュプログラムを8月におこないます。山北町中川での川遊び、丹沢湖畔でのキャンプファイヤーなど自然のなかで2日間過ごした後、最終日は横浜散策をするプログラムです。

「神奈川リフレッシュプログラム」へのご賛同をどうぞよろしくお願いいたします。

主催	福島子ども・こらっせ神奈川
日程	2019年8月5日(月)～7日(水)
参加対象	榎葉町・双葉町・富岡町・いわき市周辺の子どもたち 小学生(3年生から)20人
場所	バーデンライフグループ研修センター(山北町中川温泉)
後援	榎葉町 榎葉町教育委員会 双葉町 双葉町教育委員会 山北町 山北町教育委員会 神奈川県 神奈川県教育委員会 (財)神奈川県高等学校教育会館

あなたも賛同人になってください!

賛同金 個人一口3,000円 団体一口10,000円

ご賛同いただける方は、振込用紙に住所・電話番号・メールアドレスの記載をお願いいたします。

報告書、ニュースレター、各種案内をお送りします。カンパも歓迎です。

振込先 郵便振替 口座名称 福島子ども・こらっせ神奈川
口座番号 00270-7-101155

問い合わせ: 福島子ども・こらっせ神奈川

TEL:045-353-9008 FAX:045-353-9998 E-mail: info@korasse-kanagawa.org

学校は再開されたが...

日本経済新聞

2019年3月15日

困難な廃炉作業が続く東京電力福島第1原子力発電所(福島県双葉、大熊両町)から南に約10キロ。同県富岡町にある町立富岡第一、第二の2小学校の合同校舎(富岡校)を2月下旬に訪ねると、明るい声が耳に飛び込んできた。

卒業式出席を控えた5、6年生が、お世話になった地域の人にお礼の手紙を書く活動の真っ最中。「あの人は私が書く!」この人にはおれが...」。笑顔がはじける。

地元で7年ぶり

2校は事故後、避難先の同県三春町の仮校舎で運営していたが2018年4月、ほぼ7年ぶりに町内で再開した。児童数は計17人。6年生の児玉桃心さん(12)は避難先のいわき市からスクールタクシーで通う。「震災前の記憶はほとんどないけど、祖母や母が小学生時

福島5町村 再開小学校の児童数

4.7%

避難長引き「戻れない」

代を過ぎた富岡町で、自分も小学校に通いたかった」と喜ぶ。

桃心さんのような子供はまだ少ない。三春町の校舎、児童は計140人だ。は今も存続。18年度は富岡

校を上回る26人の児童が通う。富岡と三春の教室をインターネットでつなぎ授業を中継することもある。

事故で全住民が避難した7町村(浪江、双葉、大熊、富岡、葛尾、飯館、楢葉)のうち、避難指示解除を受けたのは双葉と大熊を除く5町村。学校数は18年度で9校、児童は計140人だ。地域が再開した所属自治体の学校に通うのは全体的に減少しているのだ。

で、現在の児童数はその4の6・9%だ。

5町村には今も2010年小規模化しただけではな人の児童が住民登録している。だが、9割超がいわき市、福島市といった避難先と富岡町に住んでいた子供と仲間となった」と屈託がない。

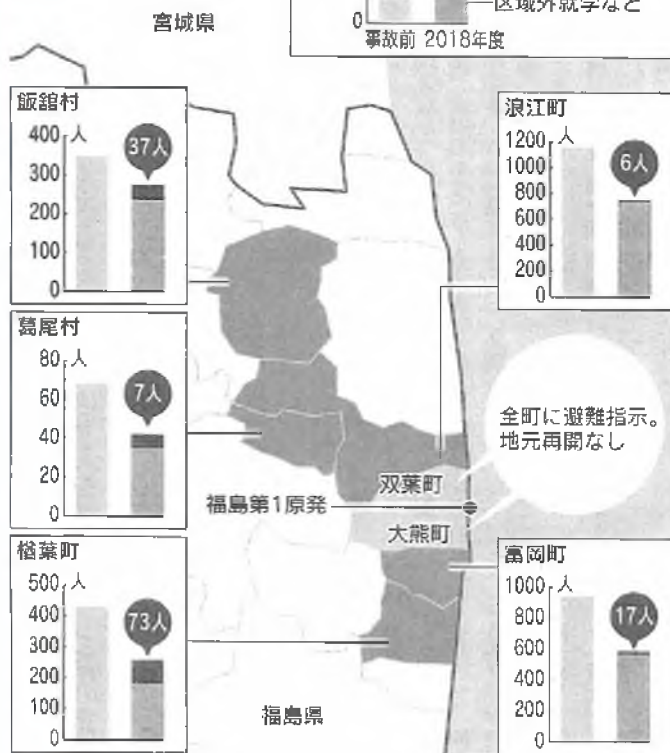
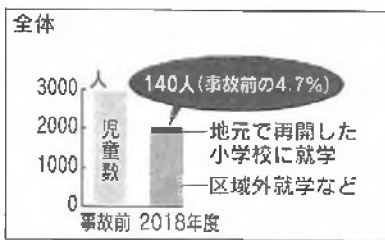
「地域の中心」に古里の学校で学ぶ子供の減少は、福島の避難自治体に共通の悩みだ。一部が避難指示区域になった川俣町



合同校舎で一緒に授業を受ける、2年生(2月、福島県富岡町)

児童の就学状況

(原発事故で全住民が避難し、地元で学校を再開した5町村)



富岡一小の岩崎校長は「10年や20年で子供が戻るとは思っていない」と言う。同校では地元の人を講師に招いてのサッカー教室やアユの稚魚放流などに取り組み、学習発表会として地域のお祭りで劇も上演する。目指すのは「コミュニティの中心になる学校」だ。

地方では、地域での小学校の存在感は都会以上に大きい。子供たちの元気な姿が増えれば町の再生にも弾みがつく。岩崎校長は「子供はもちろん、保護者にも通わせたい」と思ってもらえるようにしては、「と学校へ力を注ぐ」。

東日本大震災後の復興をデータを糸口に検証する。